

『日本古典対照分類語彙表』における「平家物語」

濱千代 いづみ

一 はじめに

『日本古典対照分類語彙表』が平成二十六年に刊行された。『古典対照語い表』（以下、旧版）の改訂増補版である。旧版では一四作品を対象にしていたが、「平家物語」「宇治拾遺物語」「新古今和歌集」の三作品を追加し、一七作品になった。そして、「万葉集」は旧版と異なる索引に変更し計量している。一七作品の使用語彙と各語の件数、意味を載せる。このデータは今後の古典語彙研究に大きく資するものであると考える。

『日本古典対照分類語彙表』では「平家物語」の数値を『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』を利用して計量している。この総索引は新日本古典文学大系『平家物語』を基にして作成したものである。そして、この底本は東京大学国語研究室蔵、高野辰之氏旧蔵本

である。刊行された影印本『高野本平家物語』によって表記を確認することができる。また、日本古典文学大系『平家物語』の本文を参照に利用できる。この書の底本は龍谷大学蔵本で、新大系と同じく寛一本系統である。

ところで、このデータを活用すべく、「平家物語」の数値に関して、その基になった『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』と対応させて点検した。すると、『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』の間違いを正すところがある一方、変更が必要と思われるところや疑問に思うところが出てきた。本稿では、主に変更が必要と思われるところについて、見出し語ごとに整理して記述する。

なお、略称として次のものを用いる。

『日本古典対照分類語彙表』・・・〈語彙表〉

『日本古典対照分類語彙表』の「平家物語」・・・〈平家〉

『平家物語』『高野本』語彙用例総索引』……『高野索引』

新日本古典文学大系『平家物語』……新大系

影印本『高野本平家物語』……影印本

日本古典文学大系『平家物語』……大系^①

二 〈語彙表〉における〈平家〉の件数

〈語彙表〉における〈平家〉の各語の件数で、変更が必要と思われるものを、見出し語の五十音順にあげて説明する。

1 ありのまま

〈語彙表〉に見出し語「ありのまま（形容動詞）」が存在する。

〈平家〉の件数は記載がないのでゼロである。以下、件数の記載がない場合、本稿ではゼロと示す。

〈高野索引〉に見出し語「ありのまま」が存在し、用例が九件載る。その用例はすべて「ありのまま」に「に」が付いている。名詞、あるいは形容動詞として認定できる。これら九件は〈語彙表〉でどのように扱われたのであろうか。見出し語「あり」と「まま」を調べてみることにする。

〈平家〉の「あり」は一四九〇件である。〈高野索引〉の「あり」

は一四六九件で、〈平家〉より二一件少ない。このほかに〈高野索引〉には「あり」を含む見出し語として「ありつる」「あんなり」が存在する。しかし、これらを〈語彙表〉は見出し語として立てていない。「ありつる」二件、「あんなり」一九件をあわせると二二件になる。これは先ほどの差二一件に合致する。〈平家〉の「あり」の数値にはこの件数が加えられており、〈高野索引〉の「ありのまま」の「あり」は含まれていないと推定する。

〈平家〉の「まま」は四四件である。〈高野索引〉の「まま」は三五件で、〈平家〉より九件少ない。「まま」を含む見出し語として〈高野索引〉に「ほしいまま」が存在するが、これは〈語彙表〉にも存在する。〈平家〉の「まま」の数値には〈高野索引〉の「ありのまま」の「まま」九件が加えられていると推定する。

〈語彙表〉の凡例「単位のがさ」の一項目に「(名詞十の(が)十名詞)」の形は、原則としてきりはなす。」という条が存在する。しかし、ただし書きの「例外としてつづける」ものに、被覆形の場合・連濁をおこした場合と並べ、次にあげるものとして「ありのまま」「きたのまんどころ」などがあがっている。

〈平家〉の「ありのまま」を九件とし、「まま」を三五件とするのがよい。

2 いけ（池）

〈語彙表〉に見出し語として普通名詞の「いけ」と固有名詞の「いけ」が存在する。〈平家〉の件数は普通名詞が一九件、固有名詞が八件である。

〈高野索引〉には普通名詞の「いけ」が九件ある。その外に〈高野索引〉には見出し語として「さるさはのいけ」「にゐのいけ」「はすのいけ」が存在する。〈語彙表〉ではこのうち「はすのいけ」を立てているが、他の二語は存在しない。固有名詞の「さるさは」と「いけ」のように分け、「いけ」を普通名詞に扱っているようだ。「さるさはのいけ」「にゐのいけ」の用例は各一件である。合計二件を普通名詞と捉えたと、普通名詞の「いけ」はあわせて一件になる。

さて、〈高野索引〉には人を表す見出し語として「いけのあまごぜん」「いけのぜんに」「いけのだいなごん」「いけのちゆうなごん」が存在する。前の二語は平清盛の継母宗子を、後の二語は異母弟の頼盛を表す。これらを〈語彙表〉は見出し語に立てていない。「いけ」と「あまごぜん」のように分けている。この「いけ」は宗子の邸宅池殿のことであり、固有名詞と考えてよい。それぞれの用例は「いけのあまごぜん」一件、「いけのぜんに」二件、「いけのだいなごん」八件、「いけのちゆうなごん」五件である。固有名詞の「いけ」は合計一六件になる。

〈平家〉の「いけ」は普通名詞一九件、固有名詞八件で合計二七件ある。同じ基準で〈高野索引〉の「いけ」を数えると、普通名詞一二件、固有名詞一六件で合計二七件になる。

〈平家〉の「いけ」の普通名詞と固有名詞の件数は見直すべきである。

3 いばどの（射場殿）

〈語彙表〉に見出し語「いばどの」は存在しない。同意の「ゆばどの」が見出し語として存在するが、〈平家〉の件数はゼロである。

〈高野索引〉には「いばどの」が存在し、用例は一件である。〈高野索引〉では章題の語彙も用例に載せているが、〈語彙表〉ではそれを除き、本文の用例を計量している。「いばどの」は本文中の用例である。新大系で「弓場殿」に「イバドノ」と振り仮名があり、振り仮名は影印本でも確認できるので底本にあったものである。

見出し語「いばどの」を立て、〈平家〉の件数を一とするのがよい。

4 いる（入）

〈語彙表〉に見出し語として四段活用の「いる」と下二段活用の「いる」が存在し、〈平家〉の件数は四段が一四九件、下二段が一〇一件である。

〈高野索引〉には四段が一四九件、下二段が一〇七件載っている。

四段は同じ件数であるが、下二段は六件の違いがある。

〈高野索引〉の四段の用例を詳しく見ると、下二段のものが一件紛れ込んでいる。

都へは入られずして 大津（巻⑩下三三一四）

平重衡が鎌倉から奈良へ護送される場面を描いたもので、この箇所は文脈上「いれられず」と読み、「入られず」と区切るのがよい。新大系では「入」に「いれ」と振り仮名があり、これは校注者によるものである。四段の「いる」は一四八件になる。

さて、〈高野索引〉の下二段の用例を見ると、「きこしめし も

いる」が五件、「まうし も いる」が一件存在する。このような助詞「も」を挟む連続の場合、〈語彙表〉では「きこしめしいる」のように一語に認定している。この点が先ほどの六件の違いであると推定される。しかし、四段に紛れ込んでいる一件を加えると、〈高野索引〉の下二段は一〇八件になる。

〈平家〉の四段の「いる」は一四八件、下二段の「いる」は一〇二件になる。

5 うち（内）

〈語彙表〉における「うち」の〈平家〉の件数は二五五件である。

〈高野索引〉の自立語篇で「うち」には用例が二五〇件載っている。さらに〈高野索引〉の付属語篇に自立語篇の訂正表が掲載され、その表に脱落した「うち」の用例一件が示してある。〈高野索引〉の「うち」は二五一件である。

〈高野索引〉では見出し語として「うちども」「うちのおとど」「そつのうちのおとど」が存在する。これらを〈語彙表〉は見出し語に立てていない。接尾語の付くものははずした語形に統合し、助詞「の」を含むものは分けている。それぞれの用例は「うちども」三件、「うちのおとど」一件、「そつのうちのおとど」一件である。合計五件を加えると、〈平家〉の「うち」は二五六件になる。

〈平家〉の「うち」には〈高野索引〉の訂正表が反映されていないと思量する。

6 かけ（鹿毛）

〈語彙表〉における「かけ」の〈平家〉の件数は四件である。〈高野索引〉の見出し語「かけ」のもとには「かけ」の用例が一件しかなく、三件は動詞「かけいる」の用例である。この「かけ」と「かけいる」の間には脱落がある。〈高野索引〉付属語篇の訂正表に従って見出し語と件数を示す次のようになる。

「かけ」（鹿毛） 四件

「かけあし」(駆足) 一件

「かけあひ」(駆合) 二件

「かけあふ」四段(駆合) 一件

「かけいづ」下二段(駆出) 二件

「かげいへ」人名(藤原景家) 四件

「かげいへ」人名(梶原景家) 二件

「かけいる」四段(駆入) 一八件

〈平家〉には「かけあし」から「かけいる」までの見出し語が存在しない。〈高野索引〉の訂正表を反映していただきたい。なお、「かげ」は〈高野索引〉に掲示の一件と脱落四件をあわせて五件になる。

7 かしはぎ

〈語彙表〉に見出し語として普通名詞の「かしはぎ」と人名の「かしはぎ」が存在する。〈平家〉の件数は、普通名詞がゼロであり、人名が二件である。

〈高野索引〉の普通名詞の「かしはぎ」には用例が一件、人名の「かしはぎ」には二件載っている。ともに本文中の用例である。

〈平家〉の普通名詞「かしはぎ」を一件とするのがよい。

8 きたのまんどころ

〈語彙表〉に見出し語として「きたのまんどころ」が存在するが、〈平家〉の件数はゼロである。その一方で、見出し語として「きたまんどころ」が存在し、〈平家〉の件数は七件である。

〈高野索引〉では「きたのまんどころ」に用例が七件載っている。七件のうち六件の用例では「北の政所」という表記になっており、助詞「の」が明示してある。影印本においても助詞「の」が確認できる。

〈平家〉の「きたのまんどころ」を七件とし、「きたまんどころ」をゼロにするのがよい。

9 きやうど(凶徒)

〈語彙表〉に見出し語として「きやうど」が存在し、〈平家〉の件数は一件である。この見出し語を持つ作品は〈平家〉のみである。また、見出し語「きやうど」の〈平家〉の件数は一〇件である。

〈高野索引〉では「きやうど」に一件、「きやうど」に八件、「きやうどら」に二件の用例が載っている。見出し語「きやうど」にある用例の表記は「凶徒」で、暴徒の意味を表す。これは「きやうど」の誤りである。〈平家〉は〈高野索引〉の誤りを継承した。

〈平家〉の見出し語「きやうど」をはずし、「きやうど」を一件にするがよい。

10 こけんしゅんもんゐん

《語彙表》の見出し語「こけんしゅんもんゐん」の《平家》の件数は二件である。また、見出し語「けんしゅんもんゐん」の《平家》の件数は四件である。

《高野索引》に見出し語「こけんしゅんもんゐん」は存在しない。

《高野索引》では「こ」の省かれた見出し語「けんしゅんもんゐん」に用例が七件載り、そのうち三件が「こ」の冠された語形で、四件が「こ」のない語形である。

《平家》の「こけんしゅんもんゐん」は三件にするのがよい。

11 ここちよげ、よげ

《語彙表》に見出し語「ここちよげ」は存在するが、《平家》の件数はゼロである。そして、見出し語「よげ」の《平家》の件数は三件である。

「よげ」の部分に着目すると、《高野索引》では「ここちよげなり」に用例が一件、「こころよげなり」に接頭語「御」の冠された語形が一件、「よげなり」に一件載っている。

《語彙表》の見出し語「ここち」の《平家》の件数は三三件である。一方、《高野索引》の「ここち」には三三件の用例がある。《語彙表》の《平家》では《高野索引》の「ここちよげなり」の一件を

「ここち」と「よげ」に分けて収めたようである。

《語彙表》では「こころ」を前部要素とする場合、「こころ」を独立させているので、「こころよげ」という見出し語は存在しない。そして、「こころ」の三四五件については確認できた。

《語彙表》に「ここちよげ」という見出し語が存在する以上、《平家》に一件認め、「よげ」を一件としてもよいのではないか。

12 ことなし

《語彙表》に見出し語「ことなし」は存在しない。《高野索引》では「ことなし」に用例が一件載っている。

富塵 なし 咫尺 好う して 信心 のみ 有

(巻⑤上二九三—一)

新大系では「好」に校注者の手になる振り仮名「ことな」が付されている。そして、脚注に『『好うして』のよみは正節本による。』とある。形容詞「殊なし」と判断できる。

見出し語「ことなし」を立て、《平家》を一件とするのがよい。

13 この

《語彙表》の見出し語「この」の《平家》の件数は五九四件である。《語彙表》に「このかた」「このごろ」は見出しとして存在する

が、「このたび」は存在しないので「この」と「たび」に分けている。

〈高野索引〉の「この」には用例が五九〇件、「このたび」に四件載っている。そして、付属語篇の訂正表に脱落した「この」の用例が一件示してある。

〈平家〉の「この」は五九五件になる。

14 こむ（籠）

〈語彙表〉の見出し語「こむ」（籠）の〈平家〉の件数は一〇件である。この「こむ」を後部要素とする「めしこむ」の件数は三件である。

〈高野索引〉の「こむ」には用例が一〇件、「めしこむ」には二件載っている。そして、「こむ」の用例の中に「めし や こむ」が一件存在する。

ところで、〈語彙表〉の見出し語「めす」の〈平家〉の件数は一七九件であるが、〈高野索引〉には一八一件の用例が載っている。一八一件の中に上記の「めし や こむ」の他に「めし ぞ かへす」が一件存在する。このように助詞が入る場合、〈語彙表〉では「めしこむ」「めしかへす」として扱っている。

〈語彙表〉の「めしかへす」の〈平家〉の件数は二二件であるが、〈高野索引〉の用例は二二件である。「めしかへす」の件数は単位

の取り方を反映した違いであり、正しい。

〈平家〉の「めしこむ」を三件とするなら、「こむ」は九件になる。

15 さいほく（西北）

〈語彙表〉に見出し語「さいほく」は存在しない。「せいほく」「にしきた」もない。〈高野索引〉では「さいほく」に用例が一件載っている。

見出し語「さいほく」を立て、〈平家〉を一件するのがよい。

16 さぶらひだいしやう

〈語彙表〉の見出し語「さぶらひだいしやう」の〈平家〉の件数は一七件である。

〈高野索引〉の「さぶらひだいしやう」に用例が一七件載っているが、「さぶらふ」の用例が一件誤って入り込んでいる。付属語篇の訂正表に削除の指示がある。なお、この同じ例は「さぶらふ」にも載っている。

〈平家〉の「さぶらひだいしやう」は一六件である。

17 しらす（下二段）、しる（四段）

〈語彙表〉の見出し語「しらす」の〈平家〉の件数は一四件、

「しる」は一八二件である。〈高野索引〉にも同じ件数の用例が載っているが、「しる」に「しらす」の用例が一件誤って入り込んでいる。付属語篇の訂正表に変更が示してある。

〈平家〉の「しらす」は一五件、「しる」は一八一件になる。

18 ぜんぼう（禪房）（人名）、ぜんやう（禪永）（人名）

〈語彙表〉の見出し語「ぜんぼう」の〈平家〉の件数は四件、「ぜんやう」は一件で、ともに〈平家〉にのみ件数が示されている。

〈高野索引〉では「ぜんぼう」に用例が一件載っているが、見出し語「ぜんやう」は存在しない。

『平家物語総索引』（以下、〈龍大索引〉^③）では「ぜんぼう」という見出し語は存在せず、「ぜんよう」（禪永）に一件載っている。

新大系本文で「禪智が弟子義宝・禪房」、大系本文で「禪智が弟子義宝・禪永」という部分にある。

「永」の呉音は仮名遣いがヤウである。

見出しを「ぜんぼう」か「ぜんやう」のどちらかにし、〈平家〉の件数を一件にするのがよい。

19 だいぐうじ、だいぐんじ（大宮司）

〈語彙表〉の見出し語「だいぐうじ」の〈平家〉の件数は二件、

「だいぐんじ」は一件である。

〈高野索引〉に見出し語「だいぐうじ」は存在しないが、「うさのだいぐうじ」に用例が一件載っている。また、「だいぐんじ」に用例が一件、「あつたのだいぐんじ」にも一件載っている。

〈語彙表〉では「うさ」や「あつた」を独立させている。

〈平家〉の「だいぐうじ」は一件、「だいぐんじ」は二件になる。

20 ちゅうばつ

〈語彙表〉の見出し語「ちゅうばつ」の〈平家〉の件数は四件である。〈高野索引〉に見出し語「ちゅうばつ」は存在しないが、「ちゅうばつす」に三件、「ちゅうばつせられ」に一件用例が載っている。〈語彙表〉では二字漢語とサ変動詞を分けているので、計四件としたようである。

ところで、〈語彙表〉の〈平家〉では章題を計量しないが、〈高野索引〉では章題も用例に示している。「ちゅうばつせられ」は章題である。

〈平家〉の「ちゅうばつ」は三件になる。

21 ちんず

〈語彙表〉の見出し語「ちんず」の〈平家〉の件数は六件、「ち

んじまうす」は四件である。〈語彙表〉では「うったへまうす」「うらなひまうす」などのように、「まうす」を単位の後部要素として扱っている。

〈高野索引〉の「ちんず」に用例が六件載っている。見出し語「ちんじまうす」は存在しない。また、「ちんず」が単位の後部要素になる見出し語も存在しない。〈高野索引〉では「ちんず」と「まうす」のように分け、「まうす」を独立させている。「ちんず」六件のうち四件は連用形「ちんじ」に「まうす」が接続する用例である。

〈平家〉の「ちんず」は二件になる。

22 つく(付)(四段)

〈語彙表〉の見出し語「つく」(付)(四段)の〈平家〉の件数は一七一件である。

〈高野索引〉の「つく」(付)(四段)には一七二件の用例が載っている。この中に「とり も つく」が一件存在する。〈語彙表〉ではこれを「とりつく」と扱っている。この一件を除くと一七一件になる。

ところで、付属語篇の訂正表に脱落した「つく」の用例が一件示してある。これを加えると〈平家〉の件数は一七二件になる。

23 ともに

〈語彙表〉の見出し語「ともに」の〈平家〉の件数は五五件である。〈高野索引〉の「ともに」にも五五件の用例が載っていて同数である。

しかし、付属語篇の訂正表に脱落した「ともに」の用例が三件示してある。これを加えると〈平家〉の件数は五八件になる。

24 とり

〈語彙表〉の見出し語「とり」の〈平家〉の件数は二六件である。〈高野索引〉の「とり」には二二件の用例が載っている。

〈高野索引〉には「とり」を含む見出し語に、「とぶとりの」「とりのこく」「ひのとのとり」「かのとのとりのとし」があり、それぞれ用例は一件、二件、一件、一件である。この四語のうち、「かのとのとり」とし」は〈語彙表〉に見出し語が存在し、〈平家〉の件数が一件になっている。そこで、「とぶとりの」「とりのこく」「ひのとのとり」を区切り、計四件を加え〈平家〉の「とり」を二六件にしたと推量する。

「ひのとのとり」と「かのとのとり」とし」の扱い方が不ぞろいである。

25 なる（成・生）

〈語彙表〉の見出し語「なる」（成・生）の〈平家〉の件数は五四〇件である。

〈高野索引〉の「なる」（成）に五三七件、「なる」（生）に四件の用例が載っている。そして、「なる」（成）に「なりや はつ」が一件あり、これを〈語彙表〉は「なりはつ」に扱っている。「なる」（成）・「なる」（生）をあわせ、「なりはつ」を除くと〈語彙表〉と同じく五四〇件になる。

ところで、「なる」（成）の中に助動詞の用例が一件紛れ込んでおり、付属語篇の訂正表に削除の指示がある。また、訂正表には脱落した「なる」（成）の用例が四件示してある。

以上を加減すると、〈平家〉の件数は五四三件になる。

26 にく（憎）

〈語彙表〉に「にくし」の語幹「にく」は見出し語として存在しない。「にくし」の〈平家〉の件数は四件である。

〈高野索引〉には見出し語として語幹「にく」が存在し、用例が一件載っている。そして、「にくし」には用例が四件載っている。

語幹を見出し語として立てないなら、〈平家〉の「にくし」は五件になる。

27 ばうくわん（坊官）

〈語彙表〉に見出し語「ばうくわん」は存在するが、〈平家〉の件数はゼロである。

〈高野索引〉の「ばうくわん」には用例が一件載っており、この用例は章題にはあたらない。

〈平家〉の件数は一件になる。

28 ふるかは（布留川）

〈語彙表〉に見出し語として「ふるかは」（布留川）、「ふるかは」（古河）が存在し、〈平家〉の件数はそれぞれ一件である。

〈高野索引〉に見出し語「ふるかは」（布留川）は存在しない。「ふるかは」（古河）には用例が一件載っている。〈龍大索引〉にも見出し語「ふるかは」（布留川）は存在せず、「ふるかは」（古河）に一件ある。

〈平家〉の「ふるかは」（布留川）はゼロとするのがよい。

29 ほふもん（法文）・ほふもん（法門）

〈語彙表〉に見出し語として「ほふもん」（法文）、「ほふもん」（法門）が存在し、〈平家〉の件数はそれぞれ二件である。

〈高野索引〉の「ほふもん」には用例が二件載っており、用例の表記は「法門」である。しかし、意味を考慮して漢字をあてると「法文」になる。新大系の脚注に「法文」である旨が示してある。

〈龍大索引〉では「ほふもん」(法文)に一件、「ほふもん」(法門)に二件存在する。このうち「ほふもん」(法文)は「高野御幸」の章段に使われている。この章段は大系には収載されているが、新大系には収載されていない。そして、「ほふもん」(法門)の二件は〈高野索引〉と同じ部分に相当する。

〈語彙表〉の〈平家〉は〈高野索引〉によっている。意味に従えば、〈平家〉の「ほふもん」(法文)を二件とし、「ほふもん」(法門)をゼロにするのがよい。また、〈語彙表〉で「ほふもん」(法門)に数値があるのは〈平家〉のみなので、これがゼロになれば見出し語として必要でなくなる。

30 ほろ (母衣)

〈語彙表〉の見出し語「ほろ」(母衣)の〈平家〉の件数は三件である。同音語の見出し語「ほろ」(保呂)は存在しない。

〈高野索引〉の見出し語「ほろ」(母衣)には用例が二件、「ほろ」(保呂)には一件載っている。用例の表記はどれも平仮名であるが、意味が異なる。前者は鎧の背の布帛を指し、後者は鳥の羽を指す。

〈語彙表〉に見出し語「ほろ」(保呂)を設け、〈平家〉の数値を一件入れ、「ほろ」(母衣)を二件にするとよい。

31 もちて、もつて

〈語彙表〉の見出し語「もちて」の〈平家〉の件数は一二四件で、『もて、もつて』をふくむ」という注記がある。その一方で見出し語「もつて」が存在し、〈平家〉に二件と示してある。また、「もつて」に数値の入っているのは〈平家〉一作品である。

〈高野索引〉に見出し語「もちて」「もて」は存在しない。副詞用法の見出し語「もつて」に用例が二〇件載っている。また、「もつて」を含む見出し語に「ここをもつて」が存在し、用例が二件載っている。この「ここをもつて」は〈語彙表〉に存在しない。

数値に大差が見られるので、〈高野索引〉の動詞「もつ」の用例を調べてみた。すると、連用形に助詞「て」の接続する形が一〇四件存在した。〈高野索引〉の動詞「もつ」の用例は二二七件であり、〈平家〉の動詞「もつ」の件数は一一三件である。その差は、一〇四件で先の数値に一致する。

〈平家〉の「もちて」の件数は、動詞「もつ」の連用形に助詞「て」の接続する形一〇四件に、副詞用法の「もつて」二〇件を加算した数値であると推定する。このふたつの異なるものを加算する

のであれば、「ここをもつて」から分離した「もつて」を見出し語として独立する必要はないであろう。

32 もちづき

〈語彙表〉の見出し語「もちづき」の〈平家〉の件数は二件で、注記に「馬名」とある。〈語彙表〉にはこの他に天体と地名の「もちづき」が別箇に存在するが、〈平家〉の件数は各々ゼロである。

〈高野索引〉には見出し語として「もちづき」〈人名〉と「もちづき」〈固有〉が存在し、それぞれ一件の用例が載っている。後者は馬名である。

〈語彙表〉で「もちづき」を馬名・天体・地名に分けるなら、人名と馬名をひとくくりにして馬名に統一する必要があると思われる。〈平家〉の「もちづき」は馬名と人名にわけるのがよい。

33 もの（物・者）

〈語彙表〉の見出し語「もの」の〈平家〉の件数は六二四件である。〈高野索引〉の「もの」には用例が五〇四件載っている。ここに一二〇件の大差がある。

〈高野索引〉には見出し語として「ものいふ」「ものおもふ」「ものども」「ものまうす」が存在し、それぞれ七件・二件・一〇七件・

四件の用例を載せる。合計一二〇件になる。これらを〈語彙表〉は「ものいふ」のようにわけたり、接尾語をはずした語形に含めたりしている。〈平家〉は上の四語の「もの」を含めて六二四件になったと推定する。

ところで、付属語篇の訂正表に脱落した一件と、削除する二件の「もの」の用例が示してある。その訂正を反映させると、〈平家〉の「もの」は六二三件になる。

34 やう

〈語彙表〉の見出し語「やう」の〈平家〉の件数は七四件である。〈高野索引〉の「やう」の用例も同数である。しかし、付属語篇の訂正表に削除する一件が示してある。〈平家〉の「やう」は七三件になる。

35 やしま

〈語彙表〉に見出し語として「やしま」〈固有地名〉、「やしま」〈固有人名〉が存在し、〈平家〉の件数は順に五四件、二件である。〈高野索引〉の見出し語「やしま」には五五件の用例が載っており、そのうち一件は章題である。章題を除くと「やしま」は五四件になり、これらは地名を表している。

〈高野索引〉ではこの他に「やしまのおほいとの」に四件、「やしまのしらう」に一件、「やしまのせんじやう」に一件の用例が載る。〈平家〉の人名の「やしま」二件は「やしまのしらう」「やしまのせんじやう」を分割して数えたものと推定する。「しらう」「せんじやう」にもそれぞれ分割したものが計上してある。

ところで、「やしまのおほいとの」はどのように扱われたのであろうか。この語も分割し、「おほいとの」に四件計上されている。〈平家〉の「おほいとの」は八八件である。〈高野索引〉の「おほいとの」の用例は八一件で、「こまつのおほいとの」に三件あるので、先ほどの四件と合わせると八八件になる。「やしま」と「おほいとの」に分割した後、「やしま」の扱いを保留にしたものらしい。

この四件を〈平家〉の「やしま」〈固在地名〉に含めるのがよい。「やしま」〈固在地名〉は六件になる。

36 やすくに

〈語彙表〉に見出し語「やすくに」は存在しない。しかし、〈高野索引〉の見出し語「やすくに」に用例が二件載っている。人名で同一人物を表す。章題での使用でもない。

〈語彙表〉に見出し語を設け、〈平家〉の欄に二件と示すのがよい。

37 よげ・こちよげ

〈語彙表〉の見出し語「よげ」の〈平家〉の件数は三件である。〈高野索引〉の「よげなり」には用例が一件載っている。〈高野索引〉ではこの他に「こちよげなり」「こころよげなり」にそれぞれ一件の用例が示してある。この二語を分割して〈平家〉の「よげ」を三件にしたと推定する。「こち」「こころ」にも分割したものが計上してある。

ところで、〈語彙表〉には見出し語「こちよげ」が存在し、〈平家〉の欄はゼロであるが、他作品の欄に数値が示してある。単位の取り方をそろえることを望む。

38 よりかた・よりかぬ

〈語彙表〉の見出し語「よりかた」の〈平家〉の件数は四件である。〈高野索引〉では見出し語「よりかた」(遠藤)に一件、「よりかた」(監物)に三件の用例が載る。しかし、「よりかた」(監物)の後ろの二件は「よりかぬ」(頼兼)の用例である。付属語篇の訂正表に見出し語「よりかぬ」脱落の指摘がある。

〈語彙表〉では同名の場合一つにまとめ、〈高野索引〉では同名でも別人の場合区別している。〈平家〉の「よりかた」を二件にし、見出し語「よりかぬ」を設けて二件と示すのがよい。

39 よる（依・因）、よる（寄）

〈語彙表〉の見出し語「よる」〔依・因〕、「よる」〔寄〕の〈平家〉の件数は、それぞれ一四〇件、二三件である。あわせると一六三件になる。

〈高野索引〉の「よる」〔依・寄〕〈四段〉には一七五件の用例が載っている。〈高野索引〉の用例の中に「おもひ も よらず」が一・二件存在する。〈語彙表〉ではこれを「おもひよる」と認定したと推定する。一七五件から二件を引くと一六三件になる。

ところで、付属語篇の訂正表に「おもひ も よらず」一件、「あゆま せ よる」二件の用例脱落が指摘されている。「あゆま せ よる」の「よる」二件を加えると、〈平家〉の「よる」〔寄〕の件数は二五件になる。

なお、「おもひよる」については〈平家〉が一八件、〈高野索引〉の用例が五件である。〈高野索引〉に「おもひ も よらず」が一・二件あるので「おもひよる」は一七件になる。これに付属語篇の訂正表の一件を加えると二八件になる。「おもひよる」に限り訂正表が反映された結果に一致する。

40 りやうしよく

〈語彙表〉に見出し語「りやうしよく」〔両職〕は存在しない。

しかし、〈高野索引〉の見出し語「りやうしよく」に用例が二件載っている。章題での使用でもない。〈龍大索引〉にも見出し語「りやうしよく」〔両職〕が存在し、二件示されている。

〈語彙表〉に見出し語を設け、〈平家〉の欄に二件と示のがよい。

41 ろうのごしよ

〈語彙表〉に見出し語「ろうのごしよ」〔籠御所〕は存在しない。〈高野索引〉の見出し語「ろうのごしよ」に用例が二件載っている。

ところで、〈平家〉の「ごしよ」の件数は一〇二件であるが、〈高野索引〉の「ごしよ」には用例が九三件載っており、九件の差異がある。「ろうのごしよ」以外に〈高野索引〉で「ごしよ」を含む見出し語に「かやのごしよ」「ごしよども」「はまのごしよ」「ゆきみのごしよ」をかがのごしよ」があり、用例は順に二件・一件・一件・一件・二件である。「ごしよ」を含む語は全部で九件になり、先ほどの差異に合致する。また、助詞「の」の前面にあたる「かや」「はま」「ゆきみ」「をか」は〈語彙表〉に見出し語が存在し、〈平家〉の欄に件数が計上されている。しかし、「ろう」〔籠〕という見出し語、さらには「らう」〔牢〕というのも存在しない。

〈語彙表〉に見出し語「ろう」〔籠〕を設け、〈平家〉の欄に二件と示のがよい。

《語彙表》の見出し語「わうじ」（神社）の《平家》の件数は八件である。《高野索引》の「わうじ」（熊野権現の末社）にも用例が八件載っていて同数である。しかし、《高野索引》にはこの他に神社を表す「わうじ」を含む見出し語として、「いはしろのわうじ」「ふぢしろのわうじ」が存在し、それぞれ一件の用例が載っている。そして、助詞「の」の前部にあたる「いはしろ」「ふぢしろ」は《語彙表》に見出し語が存在し、《平家》の欄に件数が計上されている。《平家》の「わうじ」（神社）の件数は一〇件になる。

では「わうじ」（皇子・王子）の場合はどうであろうか。

「わうじ」（皇子）の《平家》の件数は五一件、《高野索引》の「わうじ」（皇子・王子）の用例数は四五件で六件の差異がある。しかし、《高野索引》には見出し語として人を表す「おほとものわうじ」「おはやまのわうじ」「をばらのわうじ」が存在し、順に四件・一件・一件の用例が載っている。助詞「の」の前部にあたる「おほとも」「おはやま」「をばら」は《語彙表》に見出し語が存在し、《平家》の欄に件数が計上されている。後部の「わうじ」は六件になり、さきほどの差異に一致する。

《平家》の「わうじ」（神社）の件数は一〇件とするのがよい。

三 おわりに

《語彙表》における《平家》の各語の件数で変更が必要と思われるものについて、その根拠をあげて説明した。これらは《語彙表》の《平家》と《高野索引》の件数の相違が解明できたものである。しかし、次のように双方の相違が不明のままになったものもいくつかある。

① けう（稀有）

《語彙表》の見出し語「けう」の《平家》の件数は三件である。《高野索引》の「けう」には用例が一件、「けうなり」には二件載っている。語幹部分で合計すると三件になる。《龍大索引》でも「けう」の件数は三件である。

② ひとへ（偏）

《語彙表》の見出し語「ひとへ」の《平家》の件数は二〇件である。「ひとへ」には助詞「に」の付いた形も含まれる。

《高野索引》に見出し語「ひとへ」は存在せず、「ひとへに」に二六件の用例が載っている。《龍大索引》の「ひとへに」にも二六件ある。

〈語彙表〉は今後の古典語彙研究に大きく寄与するデータである。本稿にあげた内容はデータ全体から見ると微々たるもので、統計の傾向に大きな影響があるわけではない。しかし、精度向上の一助になると考える。

注

- (1) 調査に使用した文献は以下のものである。宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉(二〇一四)『日本古典対照分類語彙表』笠間書院、近藤政美・武山隆昭・近藤三佐子(一九九六)『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』(自立語篇)勉誠社、近藤政美・武山隆昭・池村奈代美・濱千代いづみ・近藤三佐子(一九九八)『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』(付属語篇)勉誠社、梶原正昭・山下宏明校注(上―一九九一、下―一九九三)新日本古典文学大系『平家物語』上・下 岩波書店、市古貞次編(一九七三―一九八八)笠間影印叢刊『高野本平家物語』一―一二 笠間書院、高木市之助ほか校注(上―一九五九、下―一九六〇)日本古典文学大系『平家物語』上・下 岩波書店。
- (2) 大系では「好」に振り仮名「ことな」が付されている。凡例に、振り仮名は「高良神社本のものに主として従い」とある。また、「好う」の校異に竜門文庫蔵本の「コトナナウ」をあげ

ている。

- (3) 『平家物語総索引』(金田一春彦・清水功・近藤政美編 学習研究社 一九七三)は大系を使用して作成してある。